



少年の声

一九七八年十二月十日 初版発行

著者 山本 道子

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)四三一一

振替 東京一―三二六 ㊦一〇四

支局 大阪市北区曽根崎二丁目十二―七

梅田第一ビル内

電話 〇六(三一二)一五七三

印刷所 研 文 社

製本所 共 文 堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© M. Yamamoto 0093-502270-3214

少年の志

山本道子



実業之日本社

も
く
じ

吹き降り……………9

煮えた鍋の中……………45

その女……………67

不在……………91

食餌^{しょくじ}……………115

シーズン・オフ……………135

少年の声……………159

童話・ガラスの象……………223

装幀／井上洋介

少年の声

吹き降り

雨はたちまち本降りになった。路上に車を停めたまま、規子は、踏切りの向うに広がっている海を見ていた。海面は白い波頭が散乱して、激しい雨とまるで悶着を起しているように荒れ狂っている。ワイパーが忙しなく動くフロントガラスを雨は白い流れになって、規子の視界を曖昧にする。規子は気をとりなおして、車を道路脇の狭い空地に乗り入れた。

遠い空から雷鳴が走って来て、大つぶの雨がフロントガラスを叩いたと思ったら、すぐ横降りの豪雨になってしまった。規子はこの雨を突いて車を走らすのが恐ろしかった。第一行く先をはっきりきめてあるわけではない。どこへ向かって自分が車を走らせているのか、規子自身にもわかっていないことだ。この雨のなかを、踏切りを越えて突走ったら、わたしは車ごとあの海へ飛び込んでしまうだろう。規子は、空地に車を移動させながら、頭の隅でそう思った。あの岸壁を飛び越えて、発作中の海中に、車もろとも沈んでしまう――。

この雨がやむまで、ここにこうしていよう。規子は、家を出てわずか十五分足らずのところまで狂暴な雨にとり込められてしまったことに、すっかり気が転倒していた。車外の吹き降りの凄さに気をとられるよりも、頭のなかになだれこんできた雨の冷たさのほうが規子には恐ろしかった。まるで淹つばのなかに独り放り出されたような気分だ。

このまま気が遠くなって、二度と再び雨から脱出できないかもしれない。この雨はわたしだ

けに襲って来た幻の雨かもしれない。

規子はハンドルに額をおしつけて、じっと雨の音を聞いた。海鳴りを聞きわけようと耳をすましてみると、踏切りの警報が聞こえた。規子は頭を起こして、みどりの電車がのろのろ通り過ぎるのを見た。電車は二輛編成でどの窓にも勤めに出かける蒼ざめた人びとの顔がまばらに見える。規子も今しがた夫を隣りの駅まで送りとどけたばかりだ。電車から降りたらしい男が一人、傘をささないで踏切りを渡って来た。男は首をすくめて、濡れそぼれながら、それでも居直ったような大股で歩いて行った。他に人通りはない。

雨の勢いはいっこうに変らない。気のせいか一層強くなったように見える。女が一人傘をさしてこっちへ来る。海から吹きつける雨を防ぐために、傘を肩にもたせかけている。雨靴の足を小走りに動かして、前のめりの恰好で近づいて来る。髪も肩も濡れて、まるで水のなかから這いあがったような気配だ。女は急ぎ足のためか口をあけているので、まるで泣き叫んでいるように見える。泣き顔ではないとすれば、なんという形相だろう。顔面がゆがんで、なにかわめきながら、雨のなかを泳ぐように去って行く。

あの女のひとはどこから来たのだろう。まさか海のなかから出て来たわけではないだろう。規子は、バックミラーのなかに女の背後を追った。くすんだ柄ものの傘が、踊るように遠く

って行く。あのひとはどこかの主婦だろう。規子は、またハンドルの上に額をのせた。あの主婦の顔は苦痛が剝き出しになっていた。まるで皮を剝かれた魚のようだ。

しばらくの間、規子はそのままの姿勢でじっとしていた。そして再び、踏切りの警報が聞こえたとき、顔をあげた。黒と黄色に塗り分けられた二本の遮断機が、雨飛沫のなかをゆっくり降りた。それから電車が通り過ぎた。シグナルの赤いランプが、鳴りつつける警報に、まるで励まされるように点滅する。その赤ランプが消えるまで、規子はじっと見とどけた。なにもかも動いている、と規子は思った。眼にとびこんで来るどんな情景も決して沈黙にはとどまらないう。静止しているものに向きあうと、随分気分がらくになる。けれど、わたしが静止しているものに身も心もあずけてどんな平和な気分でも、それはほんのいつ時であって、すぐに、あらゆるものが動き出す――。

吹き降りはつづいている。あの赤いランプもまたすぐに動き出すだろう。遮断機も、それから人影のない風と雨の光景を横切って朝の電車がやって来る。規子はハンドルを握りしめている十本の指に気づいた。どうしてこんなにしがみついていたのだろう。指を起こしながら、規子は惨めな思いに駆りたてられた。すると泪があふれた。

雨のなかを歩いて行ったどこかの主婦のように、あのひとと同じように醜い泣き顔を向けて

雨に叩かれればいいのだ。

規子は声をあげて思いのたけ泣いてから帰ろう、と思った。しかし泪はすぐに渴いた。自分の泣き声を聞くこともなく、規子はわずかに痙攣する喉の奥で自分自身の嗚咽をたしかめていた。すると不意にちいさなレイ子の泣きじゃくる顔が見えた。レイ子は叱られるといつまでも泣きやまない。「泣きやみなさい！」規子は三歳の娘の両肩をわしづかみにしてゆすりながら命令口調でいう。レイ子は泪の溜った眼で母親の顔を見上げて、唇をかたく結ぶ。両頬が濡れて細い髪の毛がべったりはりついている。「さあ、おしっこしてらっしゃい、ヒクヒクしてないで」レイ子は背中を押されながら、いつまでも泣きじゃくる。泣きじゃくりながら、トイレットに入って腰かけると、両手でしっかり便座につかまってから、哀れっぽい声でいう。「ドアをしめちゃだめ……」

規子はレイ子が激しく泣いたあと、たまに「さあ、どうしてあんなに泣いたのか思い出すのよ、わかったらママにお話するの、いいわね」と宿題を出す。そんなことを幼児にいつたりするのは規子自身が機嫌のいいときだ。この子はどうしてこんなに泣いたのだろう……まるでこの世の終りに直面しながら、自分だけが哀しみを浴びせられたって顔だ。

「そう、ミルクをわざとこぼしてママに叱られたのね、お食事やおやつのかきこぼすの

がいちばんいけないことなの、さあ、いってごらんさい、レイ子はミルクをこぼしません」

「レイ子は、ミルクを、こぼしません」「はい、よくできました」

規子は、車をバックさせてから、踏切りを渡らずにその場でUターンした。停車して半時間ぐらいになるだろうか。雨はあいかわらずだ。黄色い傘をさした小学生たちが路上にぼんやり見える。

*

あのととき、佐々木は規子を旅行に誘った。規子は言下に、「それは無理です、だって子どもがいるんですもの」と応えた。

彼はちょっと頷いてから、笑顔で隣席の若い男に話しかけた。話しかけられたその男は、暗い表情で下をむいていた。佐々木がなにを彼にいったか規子にはよく聴きとれなかった。しかし話の内容は、だいたい想像できた。カウンターに肘をついてウイスキーを飲んでる佐々木は、上体を若い男の方にわずかに傾ける恰好になっていた。規子は二人の男の会話から閉め出されて、はじめてはっきりとした思いで店内を見まわした。カウンターがあるだけの狭い酒場に、客が詰っていた。カウンターのなかには無口な男と、白い顔をした肥った女が立っていた。白